論　文

18世紀前半におけるイングランド国教会と奴隷制
――キリスト教徒奴隷の自由――

青 柳 か お り

序論

イングランド国教会はイギリス本国の最大の宗教的勢力であったが、17 世紀以降、アメリカ植民地においては南部のメリーランド、ヴァージニアを除いて少数派の教会であった。17 世紀末においても本国の人々や国教会のアメリカ植民地への関心は低く、積極的に現地の国教会（主教制教会）を支援することはなかった。しかし、1701 年 6 月、植民地に関心の高い国教会聖職者トマス・ブレイ（Thomas Bray）の提案で「海外福音伝道協会」（the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 以下、SPG と略記）という布教団体がロンドンで設立され、アメリカ植民地へ宣教師を派遣して布教活動が行われるようになった[1]。アメリカ植民地における国教会は、プロテスタント非国教徒の諸宗派やカトリック教会と比較して弱体であった。現地では国教会は信者の数に対して聖職者が不足していた上に、アメリカ先住民や黒人といった異教徒も存在しており、SPG は聖職者を維持することと、異教徒へキリスト教を伝道することを目的として設立された[2]。異教徒とはアメリカ先住民とアフリカ系の人々を指すが、本稿ではアフリカ系奴隷のキリスト教化を扱う。

次に、SPG についての研究史を述べたい。日本において、SPG やアメリカ植民地における国教会についての研究はあまりなされていない。18 世紀における先住民への SPG による布教活動に関しては青柳の研究がある（青柳 2008）。アメリカにおいても同様に、イギリス領植民地でのキリスト教布教についての研究は少なく、SPG の異教徒への布教活動も不活発であったと考えられている。たとえば、ノルは 18 世紀初期、フランス人に比較して SPG の先住民への布教には効果がなかったとしている（Noll 1992, 73, 76）。イギリスにおけるイングランド国教会についての研究では、ウォルシュが、SPG は異教徒の改宗にはほとんど関心がなく、白人の植民地人を対象としていたと述べている（Walsh 1993, 15）。従来の研究において、SPG の活動は低い評価を受けているといえよう。近年、ア

(1) トマス・ブレイについては Thompson, 1954 を参照。
(2) SPG の設立目的は国王ウィリアム三世（William III）による勅許状に記されている。勅許状は SPG 年次記念大会の説教の巻末付録に収録されていることが多い。

ングリカン・コミュニオンについての研究が増えてきており、これらの研究では、SPG の活動を 18 世紀初頭から現代まで、地域も世界中の伝道活動について述べているが、19 世紀以降が中心で（Thompson 1951; Strong 2007）、18 世紀の SPG によるアメリカ植民地への布教活動は詳細に分析されていない。このように、SPG による異教徒への布教についての研究は、日本、イギリス、アメリカにおいてまだ本格的になされていない状況である[3]。

最近、イギリスではストロングの SPG 年次記念大会の説教を用いた研究があり、説教の内容が帝国主義や植民地の拡大と関連することはなかったとしている（Strong 2006）。また、グレゴリの研究は、非国教徒が有力なニューイングランドにおいても、SPG が祈禱書を配布して活動していたことを明らかにしている（Gregory 2010）。しかし、両方とも奴隷への布教については詳しくない。

最新の SPG を扱った研究としては、アメリカのグラッソンの研究が挙げられる（Glasson 2011）。彼は SPG 年次記念大会の説教、宣教師の報告書や手稿史料を用いて奴隷布教について明らかにしているが、ニューヨークとギニアにおける SPG 宣教師など個別の宣教師の分析が中心となっている。布教に熱心なロンドン主教エドマンド・ギブソン（Edmund Gibson）が奴隷の主人に向けて書いた著作を紹介して、SPG が奴隷布教に関わっていたことを述べているが、彼の研究においても、SPG の奴隷制についての思想や、キリスト教徒となった黒人奴隷の自由についての分析はあまりなされていないのである。

以上のような研究に対して、本稿では、SPG がキリスト教徒奴隷の自由や奴隷制についてどのような思想を持っていたのかを、1701 年から奴隷貿易廃止運動の開始以前の 18 世紀前半を中心に明らかにしたい[4]。

主要な史料として、SPG 年次記念大会での説教・報告書を用いた。SPG では、1702 年以降、毎年二月に代表の一人の聖職者が行った説教を出版しており、これらの説教を約百年分解読した。説教の対象は SPG に寄付をする会員や国教会の信者であるが、説教の反響は大きく、中にはアメリカ植民地で大量に配布されるものもあった（Humphreys 1730, 248）。説教の内容はある程度、イングランド国教会側の方針を代表していたといえるであろう。また、奴隷について言及したロンドンデリ首席司祭ジョージ・バークリ（George Berkeley）やロンドン主教ギブソンなどの国教会聖職者の著作も検討した（Berkeley 1732; Gibson 1729）。

---

(3) 岩井は、1640 年代から 50 年代にマサチューセッツ湾植民地で先住民に布教したピューリタン聖職者ジョン・エリオットを取り上げ、彼の布教活動の根底には千年王国論および先住民＝ユダヤ人説の思想があったことを明らかにしている（岩井、1998）。

(4) ウィリアムズは、18 世紀後半のイギリス人による奴隷貿易・奴隷制についての見解の歴史を概観した。たとえば、アダム・スミスは『諸国民の富』において重商主義およびイギリスによって植民地に課された奴隷制という不合理な象徴を攻撃した。一方、デヴィッド・ヒュームは『国民的性格について』において黒人の能力を酷評し、彼らは生まれつき白人よりも劣っていると主張した。奴隷制反対論者のトマス・クラークスン（Thomas Clarkson）はヒュームを批判した。しかし、奴隷制を支持する意見も多く、ジャマイカの農園主・歴史家であったエドワード・ロング（Edward Long）は、やはり黒人を酷評して奴隷制を擁護した（ウィリアムズ著、田中浩訳 1979, 5, 6, 10-19）。

第 1 節　イギリス領アメリカ植民地における奴隷と主人

1　布教の困難

布教に熱意のある聖職者や SPG の会員もいたが、奴隷の主人や奴隷商人をはじめ奴隷制を擁護する人々は、奴隷を人間ではなく、財産、所有物、家畜と考えていた。彼らは黒人奴隷を蔑視しており、奴隷に教育したりキリスト教化したりすることには反対した。SPG の説教においてさえ、1734 年、ウェルズ首席司祭アイザック・マドックス（Isaac Maddox）は、先住民と黒人は非常に迷信深い、ばかげた不敬な儀式をしており、愚かで残酷、野蛮であると非難し、黒人奴隷のことを極悪で不正であると決めつけた（Maddox 1734, 25-26）。18 世紀後半の SPG 年次記念大会の説教になるが、ロンドン主教ビールビ・ポーティアス（Beilby Porteus）は次のように述べた。「我々の黒人奴隷は、ほかの被造物とのすべての比較を超えている。一般的に、彼らは育成される理解力も救われる魂も持っていないので、単なる機械、労働するための道具と考えられている。多くの場所で洗礼の儀式のようなことが執行されているだけで、宗教の教義や義務についての適切な指導のための十分な時間や援助が不足している。・・・西インド諸島だけで、文字通り世界の神を知らずに生きている四十万人以上の人間がいることになる。彼らは、創造者や贖い主の知識なしに、自然宗教や啓示宗教の主義なしに、道徳的義務の思想なしに生きている。・・・」（Porteus 1783, 8-10）

SPG の布教は一部の地域では成功したが、当時の SPG 宣教師からの本部への報告においても、奴隷への布教活動がすすまないことが明らかになっている。布教の現状と困難について、1729 年、ギブソンは、主人と女主人への『二通の書簡』において、プランテーションにおける黒人は非常に人数が多く、教区は大変広大であり、牧師と教師が最大限のことを行っても、この布教が必要とするのに十分な世話や要求には不足するであろうと述べた。また彼は、奴隷が異教の儀式や偶像崇拝に慣れていること、奴隷と宣教師がお互いの言語をまったく知らないこと、主人からの反対などを布教がすすまない理由に挙げている（Gibson, 1729, 13-18）。奴隷に洗礼を授けると、彼らの財産および奴隷を自由に売却する権利が破壊され、奴隷が勤勉に労働しなくなると考えられていた。

このほかに、奴隷が非常に愚かであることや、アフリカでは一夫多妻、一妻多夫などの習慣があることなどもキリスト教化の妨げだと言われた。また、彼らは救われる魂がないのでキリスト教徒にはなれないという意見もあった（Humphreys 1730, 235; Hill 1702, 28; Robertson 1730, 11）。言語の問題に関して、宣教師たちは、英語が通じない成人ではなく若い黒人に英語教育から始めることを提案していた。アメリカでの布教活動に関心が高いバークリは、布教が成功しないのは宣教師の人数不足よりも、彼らの性格とスキル、学識、道徳が低いのが原因だとして宣教師を批判した（Berkeley 1725, 3-5）。

2　奴隷の主人たちの思想

奴隷の主人からの反対が強かったことが、布教がうまくいかない大きな原因であったようである。奴隷をやさしく扱い、キリスト教教育を受けさせる主人たちもいたが、たいていは利益を追求しており、さまざまな理由で反対していた。第一に、奴隷が教育を受けると労働時間がその分減る。第

二に、洗礼を受けると奴隷が自由になり、自分たちの財産が侵害される。第三に、奴隷が知識を持ち、傲慢になり、勤勉に働かなくなる、さらには反乱を企てるようになる、というのであった（Gibson, 1729, 18-21）。イギリス人の間では、洗礼を受けてキリスト教徒となった奴隷は自由になれるという観念や習慣があった（Hill 1702, 28; Berkeley 1732, 19）。たとえば、バルバドスについての著述をしたリチャード・リゴン（Richard Ligon）は、1673 年、プランターが彼らの奴隷がキリスト教徒になるのを許可しようとしないと述べている。彼は、「一度キリスト教徒になれば、彼らを奴隷だとみなすことはできなくなる。彼らへの支配力を失ってしまう。［奴隷に洗礼を許したら］この島のすべてのプランターと対立する。」と主人から言われたと記述した（Ligon 1673, 50）。

ただし、18 世紀後半になるが、プランターの中にはウィリアム・ノックス（William Knox）のように布教賛成の人物もいた。彼も黒人は愚鈍で愚かで怠惰で、知的ではないとしている。しかし、「奴隷の愚かさゆえに、彼らを我々が使用するための家畜だと考えることを是認できないし、まして、彼らがキリスト教の知識を受けることを否定しない。我々の植民地で生まれた黒人は疑いなく教育を受けることができる。」と書いた。そして、フランスのローマ・カトリック教会は奴隷に教育しているので、イングランド国教会による布教を勧めるとともに、奴隷に教育を受けさせないプランターを批判した（Knox 1789, 14）[5]。

さて、黒人が奴隷であることは聖書によって正当化されているという考え方がある。たとえば、創世記第 9 章 18 ～ 27 節「ノアと息子たち」である。ノアにはセム、ハム、ヤフェトという三人の息子があった。ハムはカナンの父である。あるとき、ノアはぶどう酒を飲んで酔い、天幕の中で裸になって寝てしまった。ハムは自分の父の裸を見て、外にいた二人の兄弟に告げた。ノアは酔いからさめると、ハムのしたことを知り、こう言った。「カナンは呪われよ。奴隷の奴隷となり、兄たちに仕えよ。」「セムの神、主をたたえよ。カナンはセムの奴隷となれ。神がヤフェトの土地を広げ、セムの天幕に住まわせ、カナンはその奴隷となれ。」カナンは奴隷とされ、カナンの子孫とはアフリカの黒人だと言われるようになったのであった（Goldenberg 2003, 195-197）[6]。

そのほか、旧約聖書では創世記第 17 章 12 節、創世記第 47 章 18、19 節、出エジプト記第 21 章 2 ～ 6 節、レビ記第 25 章 44 ～ 46 節などには奴隷所有についての記述がみられる。また、第 3 節でみるように新約聖書にも奴隷と主人の記述があり、奴隷制の根拠が聖書にあるとして正当化された。

⑸ アメリカ植民地における、イングランド国教会とフランスやスペインのカトリック教会との布教の競争については今後の課題としたい。

⑹ ゴールデンバーグによれば、聖書において黒人に対して否定的な感情はみられず、アフリカのクシ人の描写で肌の色は決して言及されていないという。黒人についての否定的な評価は聖書にはない。ただ、黒い色はユダヤ人の間で邪悪の比喩とされており、この比喩はヘレニズム期のユダヤ人の文書でアフリカ人の肌の色に適用された。アラビアと東アフリカ間で黒人奴隷貿易が行われ、より肌の色が薄い人々によって、アフリカ人の肌の色は奴隷と結びつけられるようになった。ムスリムが 17 世紀にアフリカを征服してアフリカ系奴隷が中東へ多数流入するようになると、ムスリムやキリスト教徒にとって黒は隷属と結びつくようになった（Goldenberg 2003, 195-197）。

第 2 節　イングランド国教会による奴隷への布教

1　国教会の布教方針

黒人奴隷への布教に反対する思想が強い中で、イングランド国教会の方針は、教会は異教徒をキリスト教化する義務がある、彼らを暗闇から光へと導くべきであるというものであった。たしかに、国教会聖職者も奴隷は非常に愚かであると考えていた。SPG 年次記念大会における説教や報告書で、多くの聖職者が異教徒に対してよく用いる表現は、野蛮、野蛮人、残酷、無知、暗黒の世界にいるなどで、迷信を信じる、貧しいといった記述が多い。いずれの説教でも異教徒の悲惨な状況の記述が多くみられた。

しかし、聖書には布教を推進するための言葉がある。たとえば、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい。（マタイによる福音書第 28 章 19 節）」「それから、イエスは言われた。全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。（マルコによる福音書第 16 章 15 節）」などである。SPG の説教においても、このような引用を用いて奴隷に布教することが熱心に説かれた。オクスフォード主教トマス・セッカー（Thomas Secker）やポーティアスをはじめ、SPG の会員の聖職者たちは、奴隷は野蛮で愚かで、恵まれない未開の不道徳な状態に長くとどめられており、政府もほとんど彼らに注意を向けていないので布教が遅れているが、奴隷の教育は可能でありキリスト教徒になれるし、布教するのは義務であると述べた。何十万人という同胞を無知、無宗教、異教へと永遠にゆだねることはできないからである（Secker 1741, 7-9; Porteus 1783, 11-13）。

ここでは、18 世紀に出版された SPG 年次記念大会における説教を中心に、その中で黒人奴隷へ積極的に布教すべきであると主張した説教を検討していく。セント・アサフ主教ウィリアム・フリートウッド（William Fleetwood）は、たとえアメリカと西インド諸島すべての奴隷が永遠に異教徒であり続けるとしても、［バルバドスにおける］コドリントンの SPG 所有の奴隷はキリスト教徒にする必要があり、彼らにキリスト教教育と洗礼を行い、永遠の命に至る道へ導かねばならないと述べている（Fleetwood 1711, 18）。

布教に反対の主人たちは、奴隷は単なる財産であり魂がないと考えていた。救われる魂がなければキリスト教化はできないが、SPG 宣教師や現地の国教会聖職者はどのように奴隷には魂があるのだと主人を説得していたのであろうか。彼らが実際に主人に示した根拠はわからなかったが、イギリス本国の SPG 年次記念大会の説教や国教徒の著作では、奴隷には魂があり、同じ出自の人間である、キリストは彼らのためにも血を流されたということを述べたものがあった。

カンタベリ首席司祭ジョージ・スタナップ（George Stanhope）は、次のように述べた。「奴隷は未開で無教育で、公共で売買され、荷物を運搬するための家畜のように働いている。しかし、彼らの魂は彼ら自身のために世話されるべきである。彼らは我々と同じ神によって創造され、同じ肉体と血によって形成され、同じ共通の子孫からの出自であり、同じ魂を授けられ、不滅の幸福を同じように受ける資格がある。彼らもまた同じ尊いイエスのあがないによって解放される。生まれと富、環境と肌の色、野蛮と奴隷、これらは単に付随的な違いである。本質的な部分が同じであり続けて

いる場合、そのようなものはあまり評価されるべきではない。」（Stanhope 1714, 16-17）

ギブソンは奴隷の主人たちに向けて、「私はあなたがたに、彼らを単なる奴隷として、労働する家畜と同じレベルで考えないよう懇願したい。そうではなくて、あなたがたと同じ体格と能力を持ち、永遠に幸福になれる魂と、それのための教育を受ける理性と理解力を持つ男性奴隷と女性奴隷として考えてほしい。・・・」と呼びかけた（Gibson 1729, 25）。

ベアクロフトは次のように奴隷も同じ人間で魂があると述べた。

> 我々のプランテーションでは、恥知らずにキリスト教の愛が無視されている。彼らは我々自身と同じ血統ではなく、救われる魂がないかのように、貧しい黒人奴隷の改宗はおろそかにされている。一方で、聖パウロは我々にはっきりとこう言われた。「神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住まわせ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。（使徒言行録第 17 章 26 節）」「その一人の方はすべての人のために死んでくださった。（コリントの信徒への手紙二第 5 章 15 節）」キリストは彼の最も尊い血を彼らのために流されたのに、キリスト教徒は恥知らずに彼らを無視できるのであろうか。（Bearcroft 1738, 19）

また、SPG の事務局長デヴィッド・ハンフリーズ（David Humphreys）や国教会聖職者アンソニー・ヒル（Anthony Hill）は、奴隷の主人たちは根拠もないのに黒人は魂がないといって彼らに教育を受けさせず、キリスト教徒になるとさらに悪い奴隷になると主張して、聖職者を迫害していることを批判した（Humphreys 1730, 235; Hill 1702, 25）。

2　SPG の奴隷制への評価

ただし、SPG 関係者は奴隷制そのものは認めていたようである。聖書において奴隷制は禁止されていないからである。たとえば、バークリは、プランターが黒人のことを不合理に差別し教育やサクラメントを受けさせないことを批判したが、洗礼を受ければ自由になれるとか、洗礼を受けることは奴隷の状態と矛盾しているというのは誤った観念であると考えていた。彼は「福音の自由は現世の奴隷状態と両立する。そして、彼らの奴隷はキリスト教徒になることによって、より良い奴隷になるであろう。」と述べた（Berkeley 1725, 5）。

また、SPG 事務局長ダニエル・バートン博士（Dr. Daniel Burton）も奴隷制を認める発言をしており、SPG の立場を表明している。クエーカー教徒で奴隷制反対者のアンソニー・ベネゼ（Anthony Benezet）という人物が、1767 年 4 月 26 日付の書簡で黒人奴隷を購入し保有することについての協会の意見を尋ねた。1768 年 2 月 6 日付の事務局長からの返事によれば、SPG はバルバドスのプランテーションの代理人に奴隷にキリスト教を教えるよう指示しており、その指示は守られてきたと信じているが、しかし、SPG は奴隷を保有する習慣を違法だとして非難することはできないと書いている。キリストの使徒たちによって与えられた主人と奴隷両方への教訓において、それとは反対のことが明らかに述べられているからである。もしも、奴隷制は違法であるという教義がイギリスの植民地

で教えられたら、主人がそれを確信するかわりに、より疑い深く残酷になり、より彼らの奴隷にキリスト教を学ばせようとしなくなるし、貧しい奴隷が奴隷制は違法だといって主人に反乱を起こすよう非常に強く誘惑されるので、双方にとって最も恐しい結果が続くとしている。事務局長はベネゼに、これ以上、奴隷制反対の意見を公表しないでほしいと要望もした（Knox 1789, 26-28）。

第 3 節　キリスト教徒奴隷の自由

1　聖書における奴隷と主人　―主人への服従―

イギリスでは、キリスト教徒に改宗した奴隷は自由になれるという観念や習慣があった。しかし、聖書においては、奴隷は主人へ服従しなければならないこと、たとえ主人と同じ宗教［キリスト教］になっても服従することが書かれているのである。ここでは SPG の説教でよく引用される聖書のテキストを挙げたい。

コリントの信徒への手紙一第 7 章では、「17 節、おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい。これは、すべての教会でわたしが命じていることです。20 節、おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。24 節、兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい。」と述べられている。さて、21 節 ‘Art thou called being a servant? care not for it: but if thou mayest be made free, use it rather’ は古代から現代まで解釈が分かれている[7]。「召されたとき奴隷であった人も、そのことを気にしてはいけません。たとえ自由の身になることができるとしても、むしろそのままでいなさい」という奴隷説なのか、「もし自由になれる機会があるなら、自由になりなさい」という自由説なのか、どちらにもとれるからである。一般的に、宗教改革者や奴隷制反対派の聖職者は自由説、奴隷制支持者は奴隷説をとる傾向が強い。ジョン・ロック（John Locke）は自由説で聖書注釈書を書いたようである（Locke, ed. Wainwright 1987, vol. 1, 319; ロック、相澤、大澤、川添訳 1999, 315）。国教会聖職者の説教の中では、コリントの信徒への手紙一第 7 章 17, 20, 24 節は引用されるが、21 節を引用したものはみつけられなかった[8]。

そのほか、エフェソの信徒への手紙第 6 章 5 ～ 7 節、コロサイの信徒への手紙第 3 章 22 節では、主人へ真心をこめて仕えることが指示されている。ペトロの手紙一第 2 章 18 節では、召し使いたちに、心からおそれ敬って主人に従い、善良で寛大な主人にだけでなく、無慈悲な主人にもそうしなさいと説き、19 節では「不当な苦しみを受けることになっても、神がそうお望みだとわきまえて苦痛を耐えるなら、それは御心に適うことなのです。」と書かれている。テモテへの手紙一第 6 章 2 節では、「奴隷と主人が同じ信者である場合は、自分の信仰上の兄弟であるからといって軽んぜず、むしろ、いっそう熱心に仕えるべきです。」としている。フィレモンへの手紙 10 ～ 22 節では、パウロが逃亡

---

(7) 野々瀬は中世カトリック教会と農奴制について検討する中で、アウグスティヌスとトマス・アクィナスの奴隷制論について述べている。二人は奴隷制を肯定しており、一般的に農奴領主でもあった中世カトリック教会は農奴解放には否定的であったという。（野々瀬、2013、137-191）さらに、野々瀬はコリントの信徒への手紙一第 7 章 21 節をめぐる奴隷説と自由説の二つの見解を紹介している（野々瀬、2013、148-150）。

(8) 第 7 章の中で 21 節以外の節を引用した SPG 年次記念大会の説教は、以下の通りである。Gibson 1729; Hallifax 1789; Newton 1769; Secker 1741; Williams 1706.

奴隷オネシモを主人フィレモンのところへ帰したので、奴隷制擁護に用いられることがある。

多くの SPG の説教や国教会聖職者の著作において、奴隷に洗礼を授けても、現世の身分および主人の奴隷所有にまったく変化は生じないということが強調された。奴隷は洗礼を受けてキリスト教徒になっても自由にはなれないということである。彼らは、奴隷制は古代から合法であることを主張し、洗礼を受けると奴隷は自由になれるという観念に反論した。そう主張することで、奴隷の解放や財産の侵害を恐れる奴隷の主人たちを安心させ、布教活動を説得しようとしたと思われる。

2　キリスト教徒奴隷の自由と洗礼の意義

1706 年、チチェスタ主教ジョン・ウィリアムズ（John Williams）は、征服や売買などで奴隷制の習慣はほとんどの世界で、すべての時代を通して続いてきたし、アブラハムの時代もそうであったと述べた。また、「洗礼によって人権は変更されず、人間の法律によって変更されるまではそのままである。そういうわけで、彼らがキリスト教徒になっても奴隷からは逃れられないし、主人からの自由を主張する権威を彼は与えられない。これらのことにキリスト教は干渉しなかった。」と述べている（Williams 1706, 20-21）。

さらに 1711 年のフリートウッドの説教を紹介したい。

> 主人が奴隷をキリスト教徒にしても、彼らの奉仕や利益を失う恐れはない。彼らがキリスト教徒を奴隷にとどめておくことは、神の法によっても、国の法によっても禁止されていない。奴隷は洗礼を受けた後も以前と同様の状態である。・・・聖パウロの時代には、キリスト教徒になることによって以前のすべての契約から自由になった人々がいたと想像できる。しかし、聖パウロは彼らにこれはキリスト教徒の自由の意味ではないと話した。キリストが彼らを自由にしたという自由は、彼らの罪からの自由や、死の恐怖や永遠の苦痛からの自由であって、彼らが自発的に従事している生活状況や、彼らの不幸によって陥った生活状況からの自由ではなかった。おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。キリストの信仰を持ったとしても、彼は以前と同じ生活状況が続くことから逃れられない。それは現世における彼の状況を変えることはない。キリスト教の自由はまったく精神的なのである。現世において、キリストの法律はこの性質を変化させない。人は自由であれ奴隷であれ、すべての義務と契約のもとにある。国家の法律も、奴隷がキリスト教徒になった時に彼を隷属から妨ぐことはできない。法律の自由が我々に何を容認したとしても、それは我々がキリスト教徒としてではなくて、イングランド人として与えているのである。それゆえ、我々の国では、奴隷を所有することや所有し続けることは合法であり、同様に、彼らがキリスト教徒であっても奴隷として所有すること、そうし続けることは合法である。・・・以下のことは、主人と奴隷に共通の誤りである。つまり、後者が真実のキリスト教の利益を考慮せずに、純粋に自由のために洗礼を求めること。そして、前者が、奴隷の奉仕を失うことを恐れてすべての方法で彼らの洗礼を妨げることである。（Fleetwood 1711, 20-21）

このほかにも、SPG 年次記念大会の説教で、奴隷へのキリスト教教育は必要であるが、奴隷がキリスト教徒になることによっても、その奴隷状態に変化はない、財産所有に変更はなされないという発言は数多くみられる（Bradford 1720, 37; Smalbroke 1733, 38; Benson 1740, 19; Secker 1741, 22; Newton 1769, 27）。

国教会聖職者ヒルの著作でも、同様の意見がみられた。

> 奴隷状態は神の法に矛盾していない。なぜなら、それは旧約聖書において禁止されていないし、出エジプト記第 21 章 1, 2 節、レビ記第 25 章 39 節、申命記第 15 章 12 節、エレミア書第 34 章 14 節などの聖書のテキストに表れているからである。奴隷制は福音の教義によっても禁止されていない。これらの理由のため、キリスト教世界のいくつかの部分では、彼ら [キリスト教徒] がトルコ人の囚人を得て、戦争の権利によって彼らを奴隷にする時、彼らはたとえトルコ人がキリスト教徒に改宗しても、彼らを自由に戻さない。奴隷状態はキリスト教と矛盾していない。我々の救い主の国は現世ではない。キリスト教宗教は人間の市民権を変更しないし、現世に関して、以前と比べて人をより良くもより悪くもしない。・・・コロサイの信徒への手紙第 4 章 1 節において、使徒は主人に奴隷を脅すことを禁止し、彼らの召し使いや奴隷を親切にするように主張しているが、彼らを手放すようにとか、自由にするようにとは主張していない。・・・奴隷制と反対の自由はキリスト教の共通の権利ではないし、原始教会の教義でもないので、イングランドの憲法によっても要求されることはない。・・・我々は奴隷がキリスト教徒になることを妨げないが、彼らをその状態にとどめるであろう。（Hill 1702, 30-32, 39, 45）

ギブソンも主人と女主人への『二通の書簡』において次のように奴隷身分を擁護した。

> キリスト教と福音を奉ずることは　市民的所有権においても、市民的関係に属するどのような義務においても少しの変更も生じさせない。・・・キリスト教が与える自由は、罪とサタンの束縛からの自由、人間の欲望と激情、法外な要求の支配権からの自由である。彼らの外面的な状況に関しては、それが以前に何であっても、奴隷であっても自由人であっても、彼らが洗礼を受けてキリスト教徒になることは、それにどのような性質の変化も起こさないのである。聖パウロはまさにこの点を直接話している。「おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。・・・兄弟たち、おのおの召されたときの身分のまま、神の前にとどまっていなさい。」（Gibson 1729, 21-22）

さて、奴隷および主人にとって洗礼はどのような意義があったのであろうか。SPG の説教では、奴隷に対しては、現世でよく主人に仕えれば来世で自由になり天国へ行けることが説明された。ノリッジ主教トマス・ヘイタ（Thomas Hayter）は次のように主張した。「奴隷は、つらい労働状態の中で、彼らが正しく行動すれば、神は彼らのために良いものを蓄えておられる。奴隷自身は、もし彼

らに与えられた計り知れない恩恵を正しく利用すれば、来世で神の子の栄光の自由への入場が認められるであろう。彼らの所有者はキリスト教の保護者として賞賛されるであろう。そして、奴隷がより繁栄し豊かになれば、所有者は真実の永遠の名誉においてより上昇するであろう。」(Hayter 1755, 21) また、メリーランド植民地在住の主任司祭トマス・ベーコン (Thomas Bacon) も次のような内容を述べた。「洗礼を受けるだけでなく、現世では神に仕えるように主人に仕えよ。そうすれば来世で天国へ行き自由になれる。神の御意志で神があなたを奴隷にしたのだから不満を持ってはいけない。洗礼はキリスト教の入り口にすぎないと覚えておくように。」(Bacon 1749, 66-69)

さらに、多くの SPG 年次記念大会の説教では、主人に対しては奴隷を人間として扱い、キリスト教主義を学ばせること、そうすれば、奴隷はまじめなキリスト教徒になり従順でより良い奴隷になり、うわべではなく心から従うようになることが主張された。また、黒人は邪悪で反抗的であるが、キリスト教徒になれば、邪悪な性質、誤り、不機嫌、復讐心、残酷性が正されてより良く、勤勉になり、反乱も起きないという趣旨の説教もあった (Chandler 1719, 28; Bradford 1720, 37; Smalbroke 1733, 37; Maddox 1734, 29; Drummond 1754, 19; Newton 1769, 27; Ellys 1759, 30) [9]。

結論

本稿では SPG を中心にイングランド国教会聖職者の説教や著作を検討し、18 世紀前半の国教会の奴隷制についての思想を明らかにすることを試みた。当時、イギリスやアメリカ植民地における奴隷の主人や多くの人々にとって、奴隷は人間ではなく、主人が購入した財産であった。彼らは、奴隷は非常に野蛮で愚かな異教徒であり、キリスト教を学ぶことは不可能で、救われる魂もなく、彼らに教育や洗礼を受けさせたりする必要はないと考えていた。一部の主人はキリスト教布教に賛成していたが、全体的に SPG のアメリカ植民地における奴隷への布教は困難であった。イギリスではキリスト教徒になれば奴隷は自由になるという習慣や観念があり、主人たちはキリスト教徒奴隷が自由になると自分たちの財産が侵害されるといって布教に反対した。また、聖書では奴隷制は禁止されていないのであった。

一方、イングランド国教会は異教徒をキリスト教化させるのは義務だと考え、奴隷への布教に熱心であった。聖職者たちも主人たちと同様に黒人奴隷のことを愚かだとみなしていたが、教育は可能で魂もあり、キリスト教化すべきだと考えていた。ただし、SPG や国教会聖職者は聖書で奴隷制は禁止されておらず、奴隷の主人への服従が書かれているとして、奴隷制を擁護した。洗礼を受けても、身分や主人の財産には変化は生じないことも強調された。そして、奴隷に対しては、洗礼を受けただけでは自由になれないが、現世で神に仕えるように主人に仕えれば、来世では自由になれると説いた。主人に対しては、奴隷をやさしく扱い教育と洗礼を受けさせれば、従順で忠実なより良い奴隷になるといって説得した。SPG や国教会の奴隷制についての思想は、奴隷制の擁護であり、キリスト教徒奴隷は自由になれないというものであった。それでも、SPG を中心にイングランド国

---

(9) ベアクロフトは、SPG 年次記念大会の説教以外の説教でも同様の主張をした (Bearcroft 1738, 19)。

教会が、主人に奴隷をやさしく扱い教育を受けさせるよう訴えたこと、奴隷を同じ人間であり救われる魂があると考えたことには意義がある。18 世紀前半、まだ奴隷貿易・奴隷制が当然とされていた時期において、このような国教会の奴隷制についての思想は思想史上重要であったと考えられる。

最後に今後の課題について述べたい。18 世紀後半には様々なキリスト教宗派によって奴隷貿易・奴隷制廃止運動が起きた。国教会は基本的に奴隷制を擁護する立場であるが、変化がみられた。SPG の説教を検討すると、一部の主教は聖書で奴隷制は否定されていないとしながらも、緩和・廃止を希望していた。最も早い段階では、1766 年にグロスタ主教ウィリアム・ウォーバートン（William Warburton）が明白に奴隷貿易を非難し、奴隷の自由を認めた。彼は「悪名高い奴隷貿易が神と人間両方の法律を直接侵害していることほど、すべての人にとって確かで明らかなものはない。造り主は人間を自由に創造し、神の恩寵は彼に彼の自由を肯定させる。」と述べた。そのほか、ブリストル主教トマス・ニュートン（Thomas Newton）、ロンドン主教ビールビ・ポーティアス、グロスタ主教サミュエル・ハリファクス（Samuel Hallifax）、ソールズベリ主教ジョン・ダグラス（John Douglas）、ノリッジ主教チャールズ・マナ・サットン（Charles Manner-Sutton）といった主教が、残酷な奴隷制や奴隷貿易を緩和すべきであり、徐々に廃止されるであろうと期待を述べた（Newton 1769; Porteus 1783; Hallifax 1789; Douglas 1793; Manner-Sutton, 1797）。今後は奴隷貿易・奴隷制反対を唱えた国教会聖職者について検討していきたい。

文献表

一次文献

A Sermon Preached before the Incorporated Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts at Their Anniversary Meeting…, London, 1702-1800.

以下、*A Sermon Preached before the SPG* と略記する。

Bacon, Thomas. 1749. *Two Sermons, Preached to a Congregation of Black Slaves, at the Parish Church of S[t]. P[eter]. in the Province of Maryland*, London.

Bearcroft, Philip. 1738. *A Sermon Preached before the Honorable Trustees for Establishing the Colony of Georgia in America and the Associates of the Late Reverend Dr. Bray at Their Anniversary Meeting March 16, 1737-38*…, London.

————. 1745. *A Sermon Preached before the SPG*.

Benson, Martin. 1740. *A Sermon Preached before the SPG*.

Berkeley, George. 1725. *A Proposal for the Better Supplying of Churches in Our Foreign Plantations, and for Converting the Savage Americans to Christianity, by a College to be Erected in the Summer Islands, otherwise Called the Isles of Bermuda*, 2nd ed., London.

————. 1732. *A Sermon Preached before the SPG*.

Bradford, Samuel. 1720. *A Sermon Preached before the SPG*.

Butler, Joseph. 1739. *A Sermon Preached before the SPG*.

Chandler, Edward. 1719. *A Sermon Preached before the SPG*.

Douglas, John. 1793. *A Sermon Preached before the SPG*.

Drummond, Robert Hay. 1754. *A Sermon Preached before the SPG*.

Ellys, Anthony. 1759. *A Sermon Preached before the SPG*.

Fleetwood, William. 1710. *A Sermon Preached before the SPG*.

Gibson, Edmund. 1729. *Two Letters of the Lord Bishop of London: The First, to the Masters and Mistresses of Families in the English Plantations Abroad; Exhorting Them to Encourage and Promote the Instruction of Their Negroes in the Christian Faith. The second, to the Missionaries There*, London.

Hallifax, Samuel. 1789. *A Sermon Preached before the SPG*.

Hayter, Thomas. 1755. *A Sermon Preached before the SPG*.

Hill, Anthony.1702. *After Baptizatus: or the Negro Turn'd Christian being a Short and Plain Discourse, Shewing I. The Necessity of Instructing and Baptizing Slaves in English Plantation. II. The Folly of that Vulgar Opinion, that Slaves Do Cease to be Slaves when Once Baptized*…, London.

Horsley, Samuel. 1799. *Substance of the Bishop of Rochester's Speech in the House of Peers, Friday, July 5, 1799, in the Debate upon the Second Reading of the Bill to Prohibit the Trading in Slaves*, London.

Humphreys, David. 1730. *An Historical Account of the Incorporated Society for Propagation of the Gospel in Foreign Parts*…, London.

Keppel, Frederick. 1770. *A Sermon Preached before the SPG*.

Knox, William. 1789. *Three Tracts Respecting the Conversion and Instruction of the Free Indians and Negroe Salves in the Colonies, Addressed to the Venerable Society for Propagation of the Gospel in Foreign Parts in the Year 1768*, new ed., London.

Ligon, Richard. 1673. *A True & Exact History of the Island of Barbadoes*…, London.

Locke, John, ed. Arthur W. Wainwright. 1987. *A Paraphrase and Notes on the Epistle of St. Paul to the Galatians, 1 and 2 Corinthians, Romans, Ephesians*, 2 vols., Oxford: Clarendon Press, vol. 1.

Maddox, Isaac. 1734. *A Sermon Preached before the SPG*.

Manners Sutton, Charles. 1797. *A Sermon Preached before the SPG*.

Newton, Thomas. 1769. *A Sermon Preached before the SPG*.

Porteus, Beilby. 1783. *A Sermon Preached before the SPG*.

[Robertson, Robert.]1730. *A Letter to the Right Reverend the Lord Bishop of London, from an Inhabitant of His Majesty's Leeward Caribbee Island, Containing Some Considerations on His Lordship's Two Letters of May 19, 1727, in which is Inserted, a Short Essay Concerning the Conversion of the Negro-Slaves* …, London.

Secker, Thomas. 1741. *A Sermon Preached before the SPG*.

Smalbroke, Richard. 1733. *A Sermon Preached before the SPG*.

Stanhope, George. 1714. *A Sermon Preached before the SPG*.

Warburton, William. 1766. *A Sermon Preached before the SPG*.

Williams, John. 1706. *A Sermon Preached before the SPG*.

二次文献

相澤一、大澤麦、川添美央子訳 1999「ジョン・ロック著『コリント人への第一の手紙注解』（上）」『聖学院総合研究所紀要』16 号、251-353 頁。

青柳かおり 2008「18 世紀前半における海外福音伝道協会とアメリカ先住民」『史潮』64 号、163-180 頁。

Glasson, Travis. 2011. *Mastering Christianity: Missionary Anglicanism and Slavery in the Atlantic World*, Oxford: Oxford UP.

Goldenberg, David M. 2003. *The Curse of Ham: Race and Slavery in Early Judaism, Christianity and Islam*, Princeton: Princeton UP.

Gregory, Jeremy. 2010. 'Refashioning Puritan New England: The Church of England in British North America, c. 1680- c. 1770.' *Transactions of the Royal Historical Society*, vol. 20: pp. 85-112.

Hume, David. 1987. *Essays, Moral, Political, and Literary*, ed. Eugene F. Miller, revised ed., Indianapolis: Liberty Fund. [ヒューム、デヴィッド著、田中敏弘訳 2011『ヒューム道徳・政治・文学論集：完成訳』名古屋大学出版会。]

岩井淳 1998「ピューリタンと北米先住民―ジョン・エリオットの千年王国論―」『人文論集』（静岡大学）49-1、137-172 頁。

Noll, Mark A. 1992. *A History of Christianity in the United States and Canada,* Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans.

野々瀬浩司 2013『宗教改革と農奴制―スイスと西南ドイツの人格的支配―』慶應大学出版会。

Pascoe, C. F. ed. 1901. *Two Hundred Years of the S. P. G.: An Historical Account of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, 1701-1900*, London: Society's Office.

Strong, Rowan. 2006. 'A Vision of an Anglican Imperialism: The Annual Sermons of the Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts 1701-1714.' *Journal of Religious History*, vol. 30, no. 2: pp. 175-198.

————. 2007. *Anglicanism and the British Empire, c. 1700-1850*, Oxford: Oxford UP.

Thompson, H. P. 1951. *Into All Lands: The History of the Society for Propagation of the Gospel in Foreign Parts 1701-1950*, London: S.P.C.K.

————. 1954. *Thomas Bray*, London: SPCK.

Vassar, Rena. 1970. 'William Knox's Defense of Slavery（1768）.' *Proceedings of the American Philosophical Society*, vol. 114, no. 4: pp. 310-326.

Walsh, John et al. eds. 1993. *The Church of England c. 1689- c. 1833: From Toleration to Tractarianism*,

Cambridge: Cambridge UP.
ウィリアムズ、E. 田中浩訳 1979『帝国主義と知識人 ――イギリスの歴史家たちと西インド――』岩波書店。
The Holy Bible, King James Version.
『聖書　新共同訳』日本聖書協会。
『新約聖書』フランシスコ会聖書研究所。

（あおやぎ　かおり・大分大学）

付記：本稿は、平成 25 ～ 28 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号 25370866）、平成 25 ～ 28 年度科学研究費補助金（基盤研究（A）課題番号 25244035）および平成 25 年度大分大学教育福祉科学部短期プロジェクトによる研究成果の一部である。

The Church of England and Slavery in the Early Eighteenth Century: Freedom of Christian Slaves

Kaori Aoyagi

The Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts, the SPG was established in 1701 in order to send the missionaries converting the American heathen. The Missionaries tried to instruct the black slaves in the plantations, however, their masters were against the SPG. The planters thought that the slaves were their property and feared that the baptism would make the slaves free. The SPG insisted that baptism did not make any alteration in civil property and that after being Christians, the slaves would be more obedient to their masters. Although the Church of England admitted the slavery, it is important that they promoted the instruction in the Christian faith for the slaves in the eighteenth century.